

島本町埋蔵文化財調査報告書

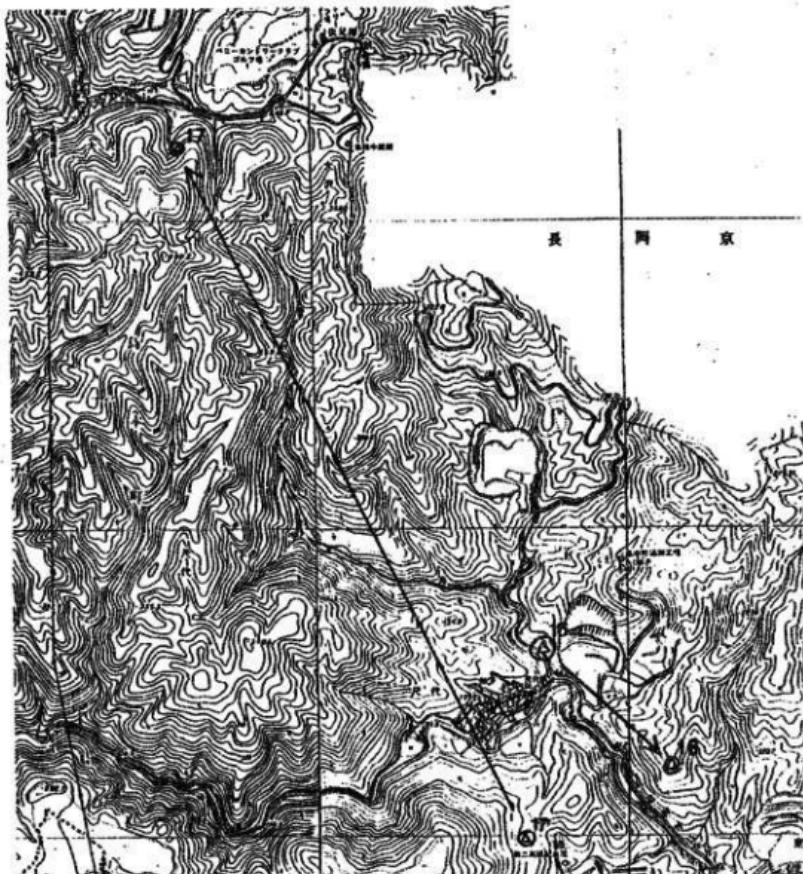
第 1 集

平成 3 年 3 月

島本町教育委員会

正誤表

★ P. 2 第1図 周辺遺跡分布図 「16. 尺代のやまもも」と「17. 大沢のすぎ」の位置を下記のとおり訂正してください。



PAGE	LINE	誤	正
P. 4	L. 4	縦軸陶器等を伴う土壙を	縦軸陶器等を伴う土坑を
P. 16	L. 20	鉢、縦軸陶器碗、黒色	鉢、縦軸陶器碗、黑色
P. 21	L. 31	土器師の杯A皿Aで	土師器の杯A皿Aで

島本町埋蔵文化財調査報告書

第 1 集

平成 3 年 3 月

島本町教育委員会

序 文

島本町は、大阪府の北東端で昔の摂津国と山城国の国境に位置します。天王山と男山に挟まれ古来より交通の要衝として栄えてきました。現在においても当町をJR京都線、東海道新幹線、阪急京都線、名神高速道路、国道171号線が通りその役割は変わっていません。

近年の経済活動の進展に伴い、宅地開発事業など各種開発事業が進められ、当町でも埋蔵文化財と関連する事例が増加してまいりました。島本町域にも現在19の遺跡があり、国民共有の財産である埋蔵文化財を保護し後世に正しく伝えることは我々の責務であることにより当町としても文化財行政を進め、埋蔵文化財の保護・調査を実施する運びとなっていました。

今回報告いたしますのは、広瀬一丁目に位置します町立第一小学校の施設整備事業に伴い平成元年度に実施いたしました広瀬遺跡の発掘調査報告です。当該地付近には旧西国街道が走り、水無瀬神宮に近く歴史的に重要な地域です。

これらの発掘調査の成果をもとに、今後郷土の歴史を解明していく資料として広く住民の皆様に活用していただき、島本町の歴史を理解する一助になれば幸いと考えております。

最後に、この報告書を刊行するにあたり大阪府教育委員会をはじめ関係者の方々に多大なご協力とご支援を賜りましたことを厚く感謝し、お礼を申しあげます。

平成3年3月31日

島本町教育委員会

教育長 吉田 博

例　　言

1. 本書は大阪府三島郡島本町広瀬一丁目5番5号に位置する島本町立第一小学校の施設整備事業に伴い、島本町教育委員会が平成元年度に実施した広瀬遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は大阪府教育委員会文化財保護課技師広瀬雅信氏の指導のもと、島本町教育委員会主事野口尚志を担当者として、1989年9月13日に着手し、1990年1月19日に終了した。引き続き遺物整理作業を行い、1991年3月31日事業を完了した。
3. 本書に用いた標高はすべてT.P.(東京湾標準潮位)により、T.P.±0mはO.P.±1.3mに当たる。また、方位は座標北を示す。
4. 本書の執筆・編集は野口が行った。
5. 調査及び整理作業に際しては、大阪府教育委員会文化財保護課、京都府教育庁指導部文化財保護課技師 久保哲正氏、京都府大山崎町教育委員会林 亨氏、寺島千春氏、島本町立第一小学校、島本町環境建設部土木經濟課をはじめ関係各位には多大な御指導御助言を賜わった。ここに厚く感謝する次第である。
6. 調査及び整理作業の参加者は下記のとおりである。
井西貴子(現財団法人八尾市文化財調査研究会)、高橋克壽(現京都大学文学部助手)、賀納章雄、久保直子、渕田房子、河村和代、江口範洋、野田穂、川上真一、森園一成、青木千恵、難波佳代子(順不同)

目 次

I. 周辺の環境	1
II. 調査に至る経過	1
III. 調査の概要	
1. A トレンチの調査	
(1) はじめに	5
(2) A トレンチの遺構	5
(3) A トレンチの遺物	8
2. B トレンチの調査	
(1) はじめに	9
(2) B トレンチの遺構	9
(3) B トレンチの遺物	14
IV. ま と め	21

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	2
第2図 調査地区位置図	3
第3図 A トレンチ平面図	6
第4図 A トレンチ断面図（西壁）	7
第5図 A トレンチ出土遺物実測図	8
第6図 B トレンチSB 01 平面図	9
第7図 B トレンチ平面図	11~12
第8図 B トレンチ断面図（北、東壁）	13
第9図 B トレンチSK 07 出土遺物実測図	15
第10図 B トレンチSK 08 出土遺物実測図	16
第11図 B トレンチSX 01 出土遺物実測図（1）	17

第12図 BトレンチSX01出土遺物実測図(2)	18
第13図 Bトレンチ包含層出土遺物実測図	19

図 版 目 次

図版1 Aトレンチ全景(北から)	25
図版2 Aトレンチ北半(東から)	27
Aトレンチ南半(東から)	29
図版3 AトレンチSD01遺物出土状況	31
Aトレンチ出土遺物	33
図版4 Bトレンチ全景(南から)	35
Bトレンチ北半(東から)	37
図版5 Bトレンチ南半(東から)	39
BトレンチSB01(東から)	41
図版6 BトレンチSK08(東から)	43
BトレンチSK07遺物出土状況	45
図版7 BトレンチSX01遺物出土状況(1)	47
BトレンチSX01遺物出土状況(2)	49
図版8 Aトレンチ出土遺物、BトレンチSK07出土遺物	51
図版9 BトレンチSK08、SX01出土遺物	53
図版10 BトレンチSX01出土遺物	55
図版11 Bトレンチ包含層出土遺物	57

広瀬遺跡発掘調査概要 I

I. 周辺の環境

島本町は大阪府の東北端にあって、京都府との府境に位置する。西は高槻市、南は淀川を境界として枚方市、東は京都府乙訓郡大山崎町・長岡京市、東南は京都府八幡市、北は京都市西京区にそれぞれ隣接する。大阪・京都の府境は淀川を隔てて対峙する天王山と男山丘陵との間、山崎狭隘部と呼ばれる部分を南北に走っている。

地形的には北西3分の2が丹波高原の延長である北摂山地からつき出た天王山山地であり東南3分の1が淀川に接した平野部である。また、淀川を挟み南方から生駒山地の延長である男山丘陵が張り出しているため大阪平野と京都盆地はわずか1kmほどの山崎狭隘部だけで接続することとなる。この地理的性格が先史時代から現在に至る島本町の歴史の発展を支える重要な条件となってきたものである。

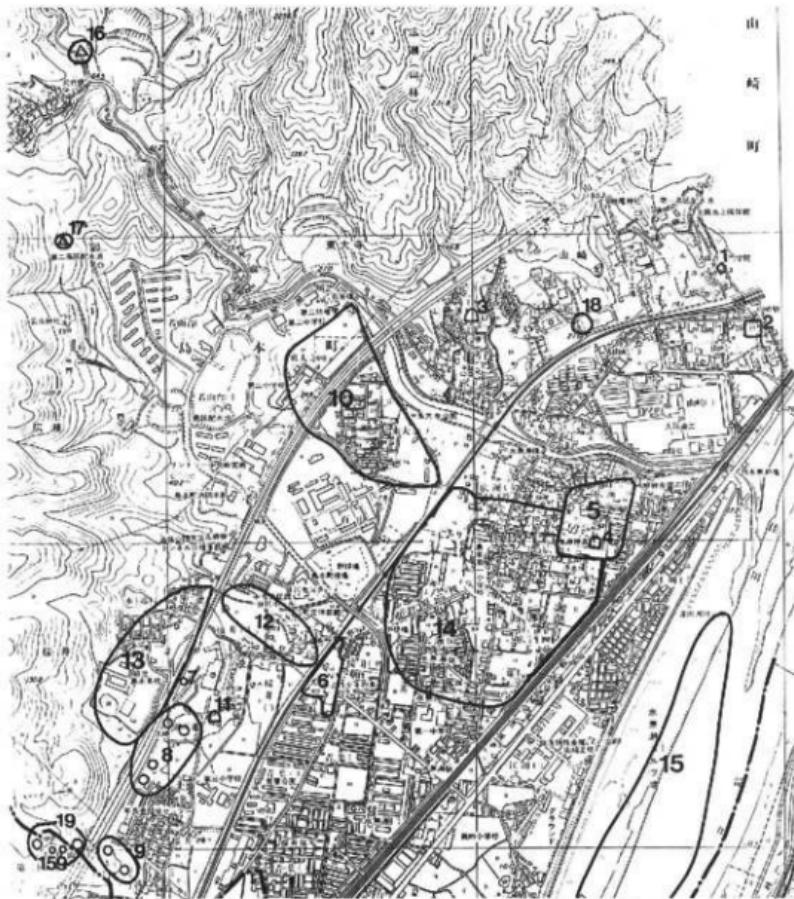
広瀬遺跡は、東大寺イロコケ山東端より山地を離れ平坦地に入り、河川運搬物を堆積させた水無瀬川右岸の扇状地性低地に位置する。本遺跡は古代から中世にかけての遺物が散布することが知られ、昭和54年町立解放会館建設の際に多量の土器等が出土し、また昭和62年大型店舗建設の際には中世の土坑が確認されている。

調査地付近には古代平安京より九州太宰府に通じる当時第1級国道であった山陽道（江戸時代には西国街道として継承された）が走り、後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関わりの深いといわれる水無瀬神宮が近く、また地元の人によって付近の田畠からは石器や土器が採集されるなど、島本町域においても考古学または歴史学上重要な地域の一つと考えられ調査の結果が期待された。

II. 調査に至る経過

島本町教育委員会は町立第一小学校の校舎増築とグランド整備事業によるプール移設工事を実施することとなった。町立第一小学校は広瀬遺跡内であるため校舎増築予定地及びプール移設候補地2カ所について試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は大阪府教育委員会文化財保護課に依頼し平成元年8月に実施され、校舎増築予定地2カ所、プール移設候補地のうちグランド側3カ所と敷地拡張地2カ所にトレンチを設定し人力掘削により調査した。



1. 山崎古墓
 2. (府重文) 開大明神社
 3. 東大寺瓦窯跡
 4. (国重文) 水無瀬神宮茶室
 5. 水無瀬離宮跡
 6. (国史跡) 桜井駅跡
 7. 伝待宵小侍從墓
 8. 越谷古墳群
 9. 源吾山遺跡
 10. 水無瀬庄跡
 11. 御所池瓦窯跡
 12. 桜井遺跡
 13. 伝桜井御所跡
 14. 広瀬遺跡
 15. 広瀬南遺跡
 16. (府天) 尺代のやまもも
 17. (府天) 大沢のすぎ
 18. 山崎西遺跡
 19. 神内古墳群

第1図 周辺遺跡分布図



第2図 調査地区位置図

調査の結果、校舎増築予定地からは中世の瓦器・土師器を伴う溝が確認され、プール移設候補地のうち敷地拡張地からも9世紀から13世紀にかけての土師器・須恵器・瓦器・瓦を伴う溝や柱擺形が確認され、グランド側からは劍頭文軒平瓦片や巴文軒丸瓦片・土師器・瓦器・縁釉陶器等を伴う土壤を確認した。

これら調査の結果を踏まえて島本町教育委員会はプール移設候補地の確定を待って、校舎増築予定地及びプール移設候補地のうち敷地拡張地側について全面発掘調査を実施することにし、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと島本町教育委員会が平成元年9月から平成2年1月までの間実施した。

III. 調査の概要

1. Aトレンチの調査

(1) はじめに

Aトレンチは校舎増築予定地で現在ある校舎に沿って北北東に設定した全長約20m、幅約7mのトレンチである。試掘調査時は2カ所のグリッドを設定し、両グリッドとも中世の遺物包含層とその下層より瓦器、土師器を伴う溝を確認した。

基本層序は盛土、旧耕作土、黄灰色褐色シルト（中世包含層）、疊混灰褐色土、黄灰色シルトである。

Aトレンチで検出された遺構は、溝5本（SD01～05）と壠（SA01）である。

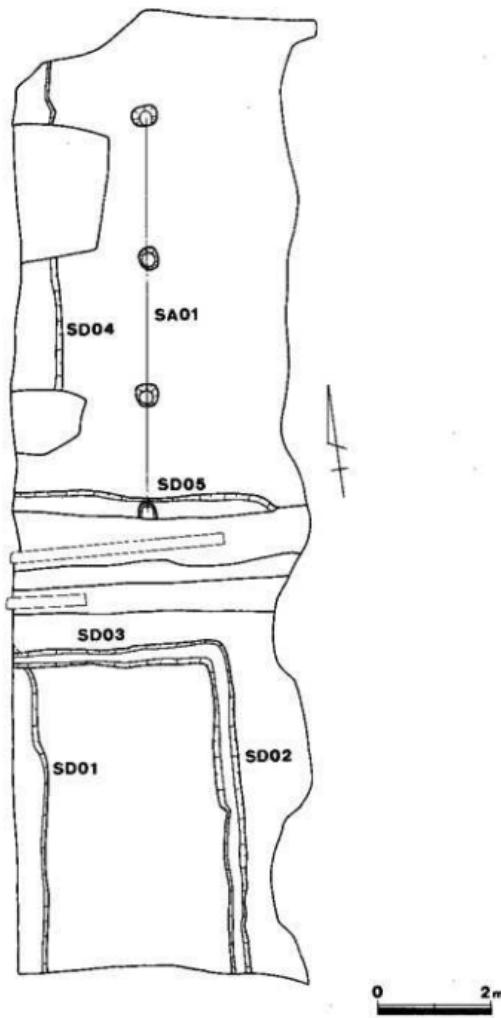
(2) Aトレンチの遺構

【溝、SD01】 トレンチの南半西側壁ぎわでN 8.5° E方向にて検出。検出長5.9m、深さ0.1mを測る。溝西肩はトレンチ外であるため溝幅は不明。北端は少しづつ浅くなり消滅するか、あるいは西へ延びると考えられる。南端はトレンチ外であるため不明であるが南へ続くと思われる。時期は溝の埋土が一層であり出土した土師器皿より12世紀末ごろと推定される。

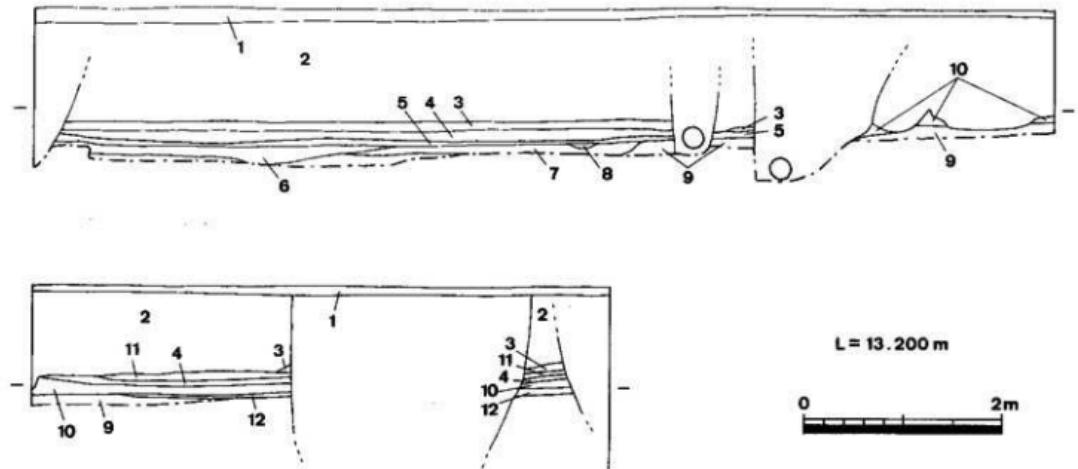
【溝、SD02、03】 トレンチ南半を南北から東西方向へL字型に折れる溝である。南北方向のSD02は検出長5.8m、幅0.5m、深さ0.1mである。東西方向のSD03は検出長3.7m、幅0.4m、深さ0.05mである。SD02の北端とSD03の東端は接続して折れており一つづきのものであるが、SD02の南端及びSD03の西端はトレンチの外へ延びるため全体像は不明である。遺構の形状より建物の雨落ち溝かと思われたが、溝に囲まれた内側及び周辺を精査した結果、柱穴等は検出されなかったため、用途は不明である。

出土遺物は土師器等、時期についてはSD01と同一検出面であり同一時期と思われる。SD03はSD01を切っているためSD02及びSD03はSD01より少し新しいと考えられる。

【溝、SD04】 トレンチ北半の西側壁ぎわにて南北方向で検出。検出長5.7m、検出幅0.84m、深さ0.06mである。溝西肩はトレンチ外、北端及び南端も不明。SD01と同一ライン上にあるが別遺構と思われる。埋土は上層が黄灰色シルト、下層が灰褐色砂質土の二層より成る。時期は他の遺構と同一検出面であり同一時期であろう。



第3図 Aトレンチ平面図



Aトレンチ土層名

- | | | |
|-------------------|--------|------------------|
| 1. コンクリート | 2. 盛り土 | 3. 耕作土 |
| 4. 黄灰色シルト（中世包含層） | | 5. 黄褐色シルト（中世包含層） |
| 6. 碾混黄褐色砂質土（SD01） | | 7. 碾混黄灰色土（とし01） |
| 8. 黄灰色粘質土（SD03） | | 9. 灰褐色礫層 |
| 10. 黄灰色シルト（SD04） | | 11. 黄灰色シルト |
| 12. 灰褐色砂質土（SD04） | | |

第4図 Aトレンチ断面図（西壁）

【溝 S D 0 5】 トレンチ中央を東西に走る溝である。検出長4.7m、深さ0.07m。

溝南肩は水道管埋設時の擾乱により不明。時期は他の遺構とはほぼ同時期であろう。

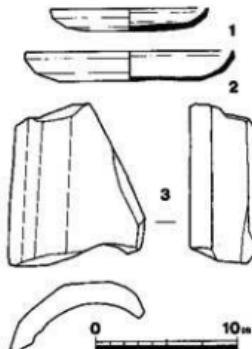
【柵 S A 0 1】 トレンチ北半中央を南北に走る3間（1間約2.3m）の柵である。柱穴は直径0.27～0.43m、深さ0.1～0.31mの円形。根石等は確認できない。Pit 3はSD 0 5を切り込んで掘り込む。東西方向へは広がらないため柵であると考えられる。出土遺物は土師器、瓦器、丸瓦である。13世紀ごろ。

(3) Aトレンチの出土遺物（第5図、図版8）

Aトレンチの出土遺物はきわめい少量で細片であるため図化できるものは下記の3点のみである。

土師器皿（1,2） 口径11.1cm、器高1.6cmと、口径14.6cm、器高2.1cmの2点。どちらもSD 0 1より出土。粘土板の手づくねによるもので、口縁部に2段のナデを施し、口縁端部を上方につまみ上げる。平安京周辺で焼かれたものであろう。12世紀末ごろと考えられる。

丸瓦（3） SA 0 1より出土したもので、凸面は広口端から狭口端方向にヘラケズリをした後、繩目叩きを施す。凹面は摩滅しているが、布目痕を残す。側縁は面取りがなされている。胎土は長石及び白雲母の細粒を含むが精良である。焼成は軟質である。



第5図 Aトレンチ出土遺物実測図

2. Bトレーニングの調査

(1) はじめに

Bトレーニングはグランド整備に伴いプールを移設するため現在あるプールの東側に新規購入した土地に北北東に設定した全長約40m、幅約20mのトレーニングである。試掘調査時には2カ所のグリッドを設定し調査した。南側のグリッドからは地表下1.0mより土師器、須恵器を伴う東西方向の溝の南肩が確認され、また北側のグリッドからは地表下0.8mより柱掘形と土師器、瓦を伴う東西方向の溝の南肩が確認された。両グリッドの遺構面上層は古代から中世の遺物を含む包含層であった。

Bトレーニングの基本層序は盛土、旧耕作土、床土（灰褐色土、中世包含層）、疊混暗褐色土（包含層）、疊混灰褐色土、黄灰色シルトである。

検出された遺構は、掘立柱建物1棟（SB01）、土坑（SK01～10、04は欠番）9カ所が確認された。

(2) Bトレーニングの遺構

【掘立柱建物 SB01】 トレーニングの西北端で検出。

梁行2間桁行2間または2間以上の総柱の掘立柱建物である。柱間は梁行が1.62m、桁行が2.32mで不等間である。柱掘形は不揃いであるがほぼ径0.5m前後の円形である。また深さも0.25m前後である。疊混灰褐色土を掘り込んでいためか、根石や礎板等の施設は認められない。時期は柱掘形からの遺物が少量で細片であるため周囲の遺物で考えれば8世紀末から9世紀初頭と思われる。

【土坑 SK05】 トレーニング中央東端で検出。東半分

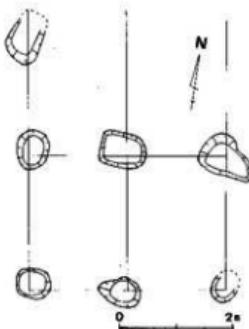
はトレーニング外であるので全体は不明。検出長南北1.8

5m、東西1.9m、深さ0.35m。12世紀末から13世紀初頭と推定される土師器皿が細かく割られ、また割れ投棄された状態で多量に出土。

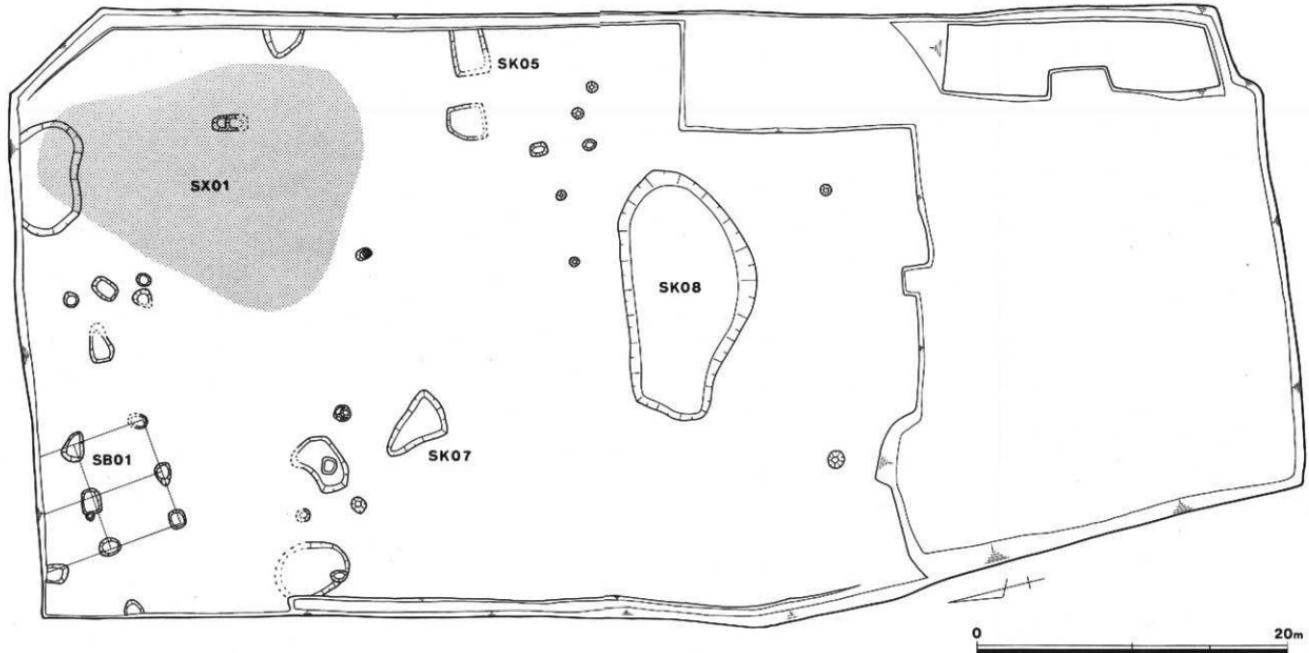
【土坑 SK07】 トレーニング中央西よりにて検出。検出径1.6m前後の不整形の円形で

深さ0.3m。SK05と同じく土師器皿が細かく割れ、投棄された状態で出土。遺物の出土状況からSK05と同じく廬芥処理用の土坑と考えられる。時期もSK05と同一時期。

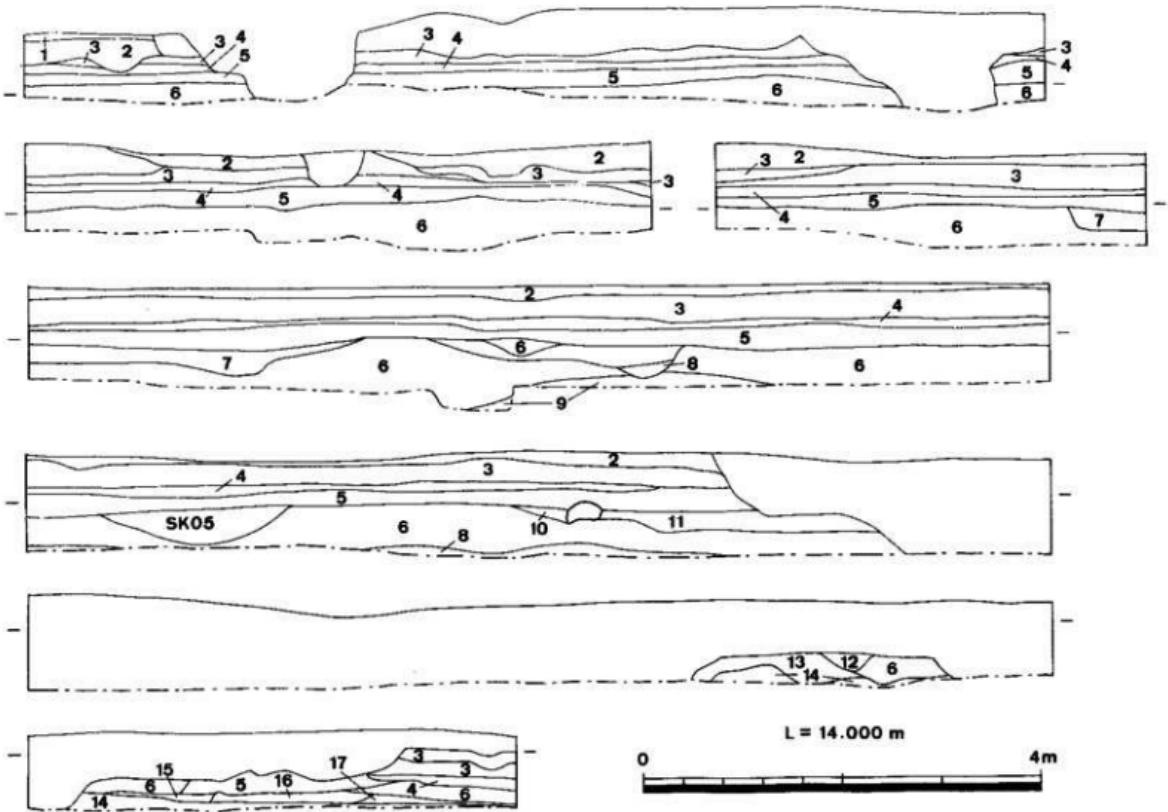
しかし、調査終了間際に断ち割って下層を確認したところ、当初考えていたよりも範



第6図 Bトレーニング SB01平面図



第7図 Bトレンチ平面図



第8図 日トレンチ断面図（北、東壁）

B トレンチ土層名

- | | |
|-------------------|---------------|
| 1. 表 土 | 2. 盛 り 土 |
| 3. 耕 作 土 | 4. 床 土 (灰褐色土) |
| 5. 碾混暗褐色土 (中世包含層) | 6. 碾灰褐色土 |
| 7. 灰褐色砂質土 | 8. 黄褐色砂質土 |
| 9. 暗褐色砂質土 | 10. 碾混暗茶褐色土 |
| 11. 黄灰褐色土 | 12. 灰褐色粘質土 |
| 13. 小碾混茶褐色土 | 14. 茶褐色粘質土 |
| 15. 淡褐色粘質土 | 16. 暗灰褐色粘質土 |
| 17. 黑褐色砂質土 | |

面が広がるようで、推定径 6 m 前後になる可能性がある。全体の範囲を確認する必要があったが時間との関係上できなかった。

【土坑・SK08】 トレンチ中央にて検出。東西 8 m、南北 4.5 m、深さ 0.55 m の長円形。埋土中は拳大ほどの石が多量に検出され、それに混って土師器、瓦、瓦器、青磁、土馬等が出土。時期については土師器皿や瓦器焼より 12 世紀末から 13 世紀と考えられる。

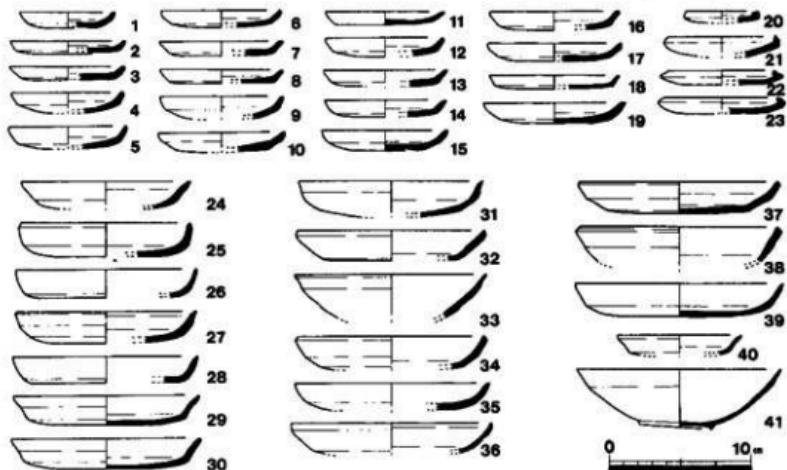
【土器灑り・SX01】 トレンチ北半中央より東側にかけて明確な掘り込み等は確認できないが、南北約 20 m、東西約 16 m の範囲の中に 8 世紀中頃から 9 世紀初頭の遺物が碾混灰褐色土の上面に散布された形で出土する。遺物は時期的にまとまっており他の遺構から出土する遺物とはまったく異なり一つの遺構とした。しかし、遺物の散布状況に一定の規則性があるとは思えず、遺構の性格・使用目的等は不明である。

その他の遺構については出土遺物が少なく、また使用性格についても不明であるので割愛する。

(3) B トレンチの遺物

B トレンチで検出された遺構で SB01 からの出土遺物は少量で細片であるため図化できるものはなかった。また、SK05 についても土師器皿が多量に出土したがいずれも細片のため図化できなかった。そこで今回は SK07、SK08、SX01 及び包含層出土の遺物について報告することとする。

【SK07】 (第9図、図版8) SK07 からの出土遺物は大半が土師器皿の細片であるが少量の瓦器焼、皿も含まれる。土師器皿は口径 9 cm 前後 (1 ~ 23) のものと口径 13 cm 前後 (24 ~ 39) の大小 2 タイプである。全体的に形態は京都の影響を受けている



第9図 BトレンチSK07出土遺物実測図

ものの在地において生産されたものと思われる。

土器皿（1～19） 口径9cm前後の小型の皿。粘土板の手づくねによるもので、口縁部に1段のナデを施し、底部に粗い指オサエが残る。

（20～23） 口縁端部を内側に折り曲げた偏平な皿である。受け皿。

（32, 37, 38） 体部が直線的に外上方へのび、口縁端部は内傾し面取りを施す。

（33） 杯型と皿型の中間的な特徴を持つ。体部上半に横ナデを施すことにより口縁部を強調する。色調は淡褐色である。他のものとは異なり京都産の可能性も考えられる。

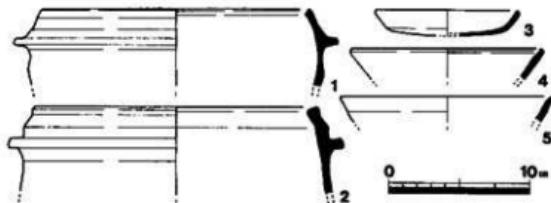
（34） 2段ナデで口縁端部を面取りぎみに内傾させ丸く仕上げる。

（36） 1段ナデで口縁部外面を直線的に上げ面取り調整を施すため端部は尖りぎみに仕上げられている。

瓦器皿（40） 口径8.0cm。粘土板手づくねにわるもので口縁部に1段ナデを施す。底部は指オサエの痕が残る。

瓦器椀（41） 口径14.2cm、器高4.1cmを測る。器壁は3mmと薄く、いびつなつくりである。体部はやや内彎ぎみで、口縁はまっすぐ斜上方にのびる。高台は低く粗末な断面三角形のものである。口縁部外面に横ナデを施し、内面に沈線は認められない。外面の暗文は省略され、指圧痕を残す。内面及び見込み部の暗文は認められない。色調は濃灰色で胎土は灰白色を呈する。

【SK 08】 (第10図、図版9) この遺構からは、土師器皿、瓦質羽釜、瓦器椀、平瓦、須恵器甕、中国産青磁椀、土馬等が出土した。



第10図 BトレンチSK 08出土遺物実測図

瓦質羽釜（1, 2） 口径が19cm前後の土釜である。口縁部は内彎し、端部断面が方形で口縁上部にナデを施す。体部内面は横位のハケ調整で、外面には指オサエの痕が残る。
(2)体部にふきこぼれが付着する。

土師器皿（3） 口径10.2cm、器高1.8cmを測る。底部は指オサエにより成形し、口縁部は横ナデを施す。

瓦器椀（4） 口径13.0cm、器壁3mmと薄い。口縁部を横ナデによりやや外反さす。口縁端部内側に浅い沈線を巡らす。

青磁椀（5） 口径14.8cm。口縁端部をつまみ上げ外反さす。中国竜泉窯系の窯であろうが、2次的な焼成を受けており釉が変色している。色調は淡緑白色。

また、図化していないが同じく竜泉窯系の椀が出土している。外面に蓮弁の陰刻を施す。

【SX 01】 (第11図、図版9, 10) SX 01は前期したように8世紀後半から9世紀にかけての遺物が散布するものである。遺物は土師器杯、皿、椀、高杯、須恵器杯、蓋、短頸壺、高杯、鉢、綠釉陶器椀、黒色土器椀、製塩土器等である。

土師器杯A (1) 口縁部外面を横ナデし底部を未調整のまま残すe手法である。底部から体部へはゆるやかな曲線で口縁部は外上方へつまみ上げる。

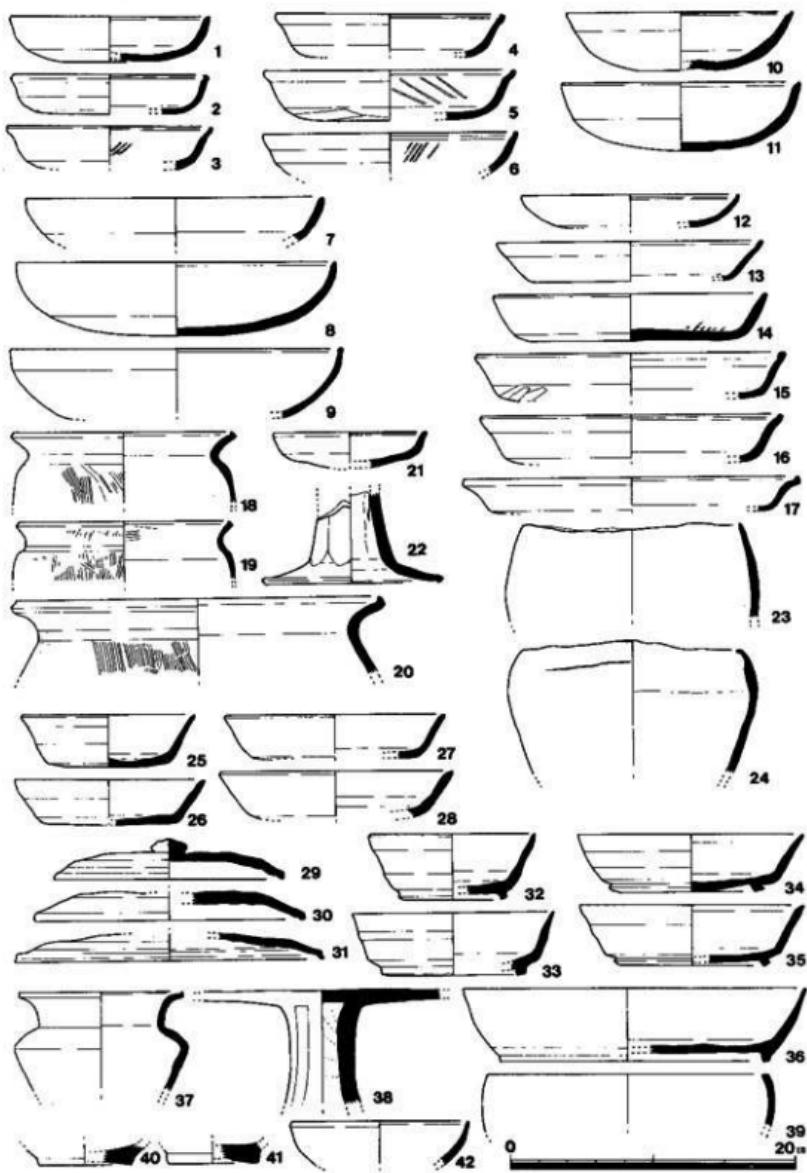
(2) 底部から体部へはゆるやかな曲線で口縁端部は内側に折り曲げ丸くおさめる。e手法。

(3~6) 口縁部を横ナデし、底部外面をヘラケズリするb手法。平坦な底部から体部は外上方へ直線的にのび、口縁端部を内側に折り曲げ丸くおさめる。(3, 5, 6)は内面に放射状の暗文を施す。

(8) 外面全体をヘラケズリするc手法。底部から体部へはゆるやかな曲線で、口縁端部を外上方へつまみ上げる。

(9) (8)と同じく底部から体部へはゆるやかな曲線であるが、口縁端部は内側へ折り曲げ丸くおさめる。b手法。

土師器椀A (10, 11) 口縁部横ナデし底部を未調整のまま残すe手法である。口縁端部は外上方へつまみ上げる。



第11図 BトレーンSX 0.1出土遺物実測図(1)

土師器皿A (12) 体部はゆるやかに内彎し、口縁端部を内側に折り曲げ丸くおさめる。

底部未調整のe手法。

(13~16) 口縁部を横ナデし底部をヘラケズリするb手法。口縁端部を内側に折り曲げ丸くおさめる。(14)は内面に放射状の暗文を施す。

土師器高杯 (17) 杯部のみ。口縁端部を内側に折り曲げ上方向につまみ上げる。

土師器甕A (18~20) 体部は縦位のハケ調整し口縁部を横位のナデを施す。口縁端部は内側に折り曲げ上方向につまみ上げる。(20)は内面を横位のハケで調整する。

土師器高杯 (22) 脚は棒心作りで9角の面取りを施す。脚台は横位のナデで調整する。

製塙土器 (23, 24) 口径15cm前後のもので4個体分出土している。何れも1~3mm程度の小石を含む粗い胎土で、粘土紐の積み上げ痕が残る。色調は赤褐色のものと淡灰褐色の2種類ある。

須恵器杯A (25~28) 高台を持たないもので、平坦な底部から体部は外上方へ直線的にのびる。口縁部は少し外反させる。

須恵器蓋A (29~31) 平坦な頂部からゆるやかにカーブしながら端部にいたり、口縁端部が直立する。(29)は偏平な宝珠状のつまみが付く。他についても同様であったと思われる。

須恵器杯B (32~36) 底部に輪状の高台を有するものである。平坦な底部から体部は外上方に直線的にのび、口縁部は少し外反する。高台は断面方形でやや外へ開く。

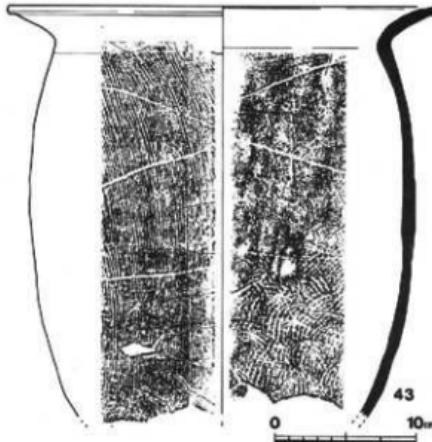
(36) は口径が20cmを超えるが

器高はそのわりに低い。

須恵器壺H (37) 体部上位が鋭く張り、口縁部は外反し端部をつまみ上げる。

須恵器高杯 (38) 偏平な杯部に三方に透かしをそなえるものである。形態的には土師器によく見られるものであるが、透かしを持つことなど相違が見られる。土師器工人が須恵器生産に携わり須恵器に見られる透かしを脚部に用いて製作したものであろう。

須恵器鉢A (39) 鉄鉢形のもの

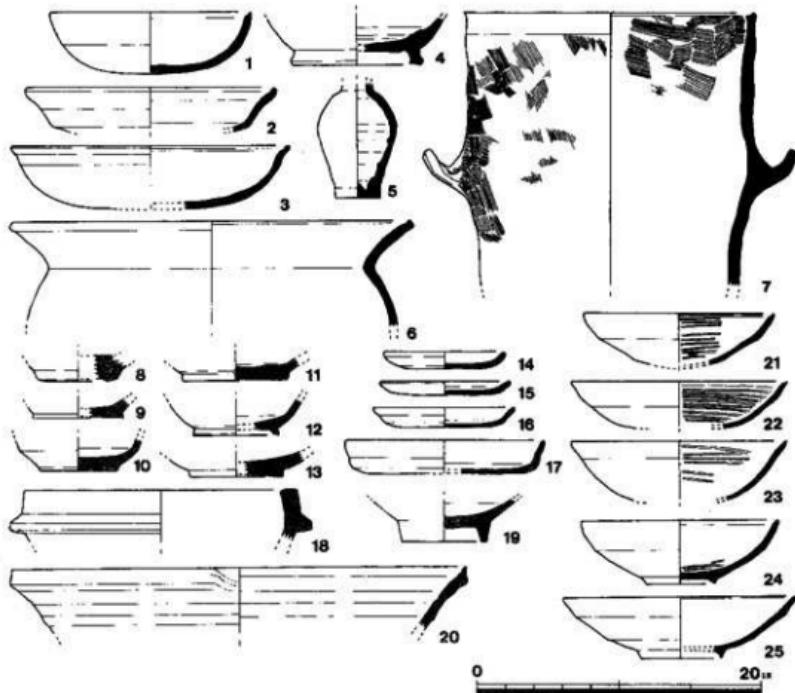


第12図 BトレーンチS X 0 1出土遺物実測図(2)

で口縁部は内彎する。口縁端部は水平な平坦面を持つ。底部がなく全体は不明。
 緑釉陶器椀（40）円板高台の底部片である。見込み部に1重の沈線が巡る。焼成は硬質。
 （41）は蛇の目高台で焼成は軟質。ともに京都洛北窯産のものであろう。
 黒色土器椀（42）内面のみ炭素を吸着させたA類である。内外面ともにヘラミガキを施し、口縁部を横ナデする。

土師器壺 C（43）細長い体部を持ち、口縁・器高ともに30cmを超える大きいものである。体部は縦方向のハケ調整で口縁部に横ナデを施す。内面は口縁部から体部上半を横方向のハケ調整をし体部下半はタタキの當て具の痕を残す。

【包含層出土遺物】（第13図、図版11）遺構に伴う遺物のはかに疊混暗褐色土層から8世紀後半から13世紀に至る遺物が出土した。この疊混暗褐色土層はその上面がほぼ水平であり遺物の出土状況からして中世に造成を行うために他の地より運ばれた整地層とももわれる。出土遺物は土師器椀、杯、瓶、皿、須恵器杯、鉢、円面鏡、綠釉陶器椀、皿、



第13図 B トレンチ包含層出土遺物実測図

瓦器碗、白磁碗、青磁碗、宋錢、滑石製鏡等である。

土師器碗（1） 底部から体部へはゆるやかにカーブし内彎する。口縁部は横ナデし、底部未調整。口縁端部は外上方へつまみ上げる。e 手法。

土師器杯（2） 体部は外反し、口縁端部を内側に折り曲げ丸くおさめる。底部は平坦で体部、口縁部とともにヘラケズリを施す。c 手法。

（3） 底部から体部にかけてゆるやかな曲線を描き、口縁部を外反さす。口縁端部は内側に折り曲げ丸くおさめる。b 手法。

須恵器壺（4） 輪状高台を巡らす壺の底部。高台は貼り付け。

（5） 小型で平高台の壺。体部は卵型を呈する。口縁部は外反しながら立ち上がる。

土師器壺（6） 体部は縦位のハケ調整し口縁部を横位のナデを施す。口縁端部は上方向に少しつまみ上げる。内面は横位のハケで調整する。

土師器瓶（7） わざかに口縁部の開いた体部で縦位のハケ調整を施す。口縁部は横ナデ。内面は横位のハケ調整。体部中位に取っ手が2個付く。

白磁（8, 19） 中国産白磁の底部である。（9）は少し淡緑白色を呈し、見込み部に1重の沈線を巡らす。

綠釉陶器素地碗（9, 11, 13） 円板高台の綠釉陶器素地碗の底部である。（13）は内外面ともヘラミガキを施す。

綠釉陶器碗（10） 緑釉陶器硬陶の碗の底部である。高台は円板高台で京都洛北窯産であろう。

土師器皿（14～17） 口径10cm前後のものと14cm前後の2種類である。ともに手づくねで1段ナデである。

須恵器鉢（20） 東播系の須恵器片口鉢である。口縁端部はつまみ上げる。

瓦器碗（21～25） どれも体部はやや内彎ぎみで、口縁は斜上方にのびる。（24, 25）は低く粗末な三角形の高台を有し、（21～23）は内面に暗文を施す。（21, 25）は口縁端部内側に浅い1重の沈線を巡らす。

註

- 1) 土師器の調整手法等については、『平城宮発掘調査報告VI』奈良國立文化財研究所1975、西弘海『土器様式の成立とその背景』真福社1986、百瀬正恒「長岡京の土器」『長岡京古文化論叢』同朋舎出版1986を参考とした。

IV まとめ

前章までに調査の概要を見てきたが、ここで検出された遺構・遺物について簡単に整理しておきたい。

(1) Aトレント

Aトレントで検出された溝は、SD01、SD04が東へ8.5°振った形で走る。これは島本町域の条里地割と合致する。SD05についてもSD01、SD04に直交するものと同じである。この島本町域の条里地割は近隣の条里地割とは異なる特異な存在である。同じ島上郡の他の地域や島下郡、また山城国乙訓郡、久世郡、河内国交野郡では正方位であるのに島本町域のみ上記のように東偏しているのである。

このように正方位の大規模条里地割の周辺部には方位の異なる別系統の地割がまれに見られる。長山泰孝氏によればこの大規模条里地割と別系統の地割の関係は、

- (1) 大規模条里地割編成前の古い地割が残ったもの。
- (2) 大規模条里地割編成後の新しい地割系統である。
- (3) 大規模な条里地割の計画を実施する段階での部分的な施行単位である。

の3つの可能性が考えられるとされている。

島本町域の場合は東大寺領水無瀬荘との関係により8世紀後半に条里地割が成立したと考えられ、島上郡全域についても同時期とされている。しかし、正方位の大規模条里地割は東偏する地割にくらべやや遅れて成立したのではないかと考えておられる。

Aトレントで検出された溝はその出土遺物、特にSD01より出土した土師器皿は二段ナデが形式化し上方向のつまみ上げる形態より12世紀末から13世紀初頭と考えられ、長山氏の説を裏付けることはできなかったものの、このころには島本町域の条里地割が成立していたことが初めて考古学的に確認できた。しかし、今回検出された溝はどれも細く浅いものであり、一町方格を区切るものとは考えられず坪内の水路であろう。

(3) Bトレント

Bトレントについてはその中で特に注意されるものはSX01出土の遺物と掘立柱建物SB01、そしてSK05、SK07出土の13世紀の遺物である。

SX01は掘り込みも確認できないもので遺構であるかも疑わしい点もあるが8世紀中頃から9世紀初頭の遺物が散布された形で出土する。土器師の杯A皿Aで見れば、杯Aはb手法が主で放射一段暗文を施す。皿Aはb手法が主であるがa手法も1点含まれ、暗文は放射一段であるがa手法のものは放射一段十連弧文である。これらのことより平

城宮IIIの時期に相当し、また須恵器杯A・杯Bについてもその法量・器形より同じく平城宮IIIと思われ、8世紀中頃と考えられる。そして胎土はきわめて精良で色調は赤褐色を呈している。これは平城宮の土師器第二群、羽曳野市茶山遺跡周辺で生産されたものと思われる。³⁾ SX 01からはこの他にも少量ではあるが京都洛北窯産縁釉陶器碗や黒色土器碗が含まれる。これらについては上層の包含層遺物がまぎれた可能性が大きく遺構の年代は8世紀中頃としたい。ではこの8世紀中頃の島本町はどのようなものであったであろうか。この時期に相当するものとして東大寺領水無瀬荘があげられる。

東大寺領水無瀬荘は聖武天皇の発願によって東大寺に施入されたもので、大仏と東大寺の造営・修理にあてるため天平十九年（747）に一千戸の封戸が寄進され、天平勝宝二年（750）にはさらに四千戸が加えられることにより、水無瀬荘もこの時期施入されたものと思われる。また、正倉院御物の中に天平勝宝八歳十二月十六日の日付をもつ「攝津國水無瀬絵図」がある。この絵図によれば水無瀬荘は現在の東大寺三丁目付近を中心としていたと考えられ東大寺の地名もそれによるものであろう。

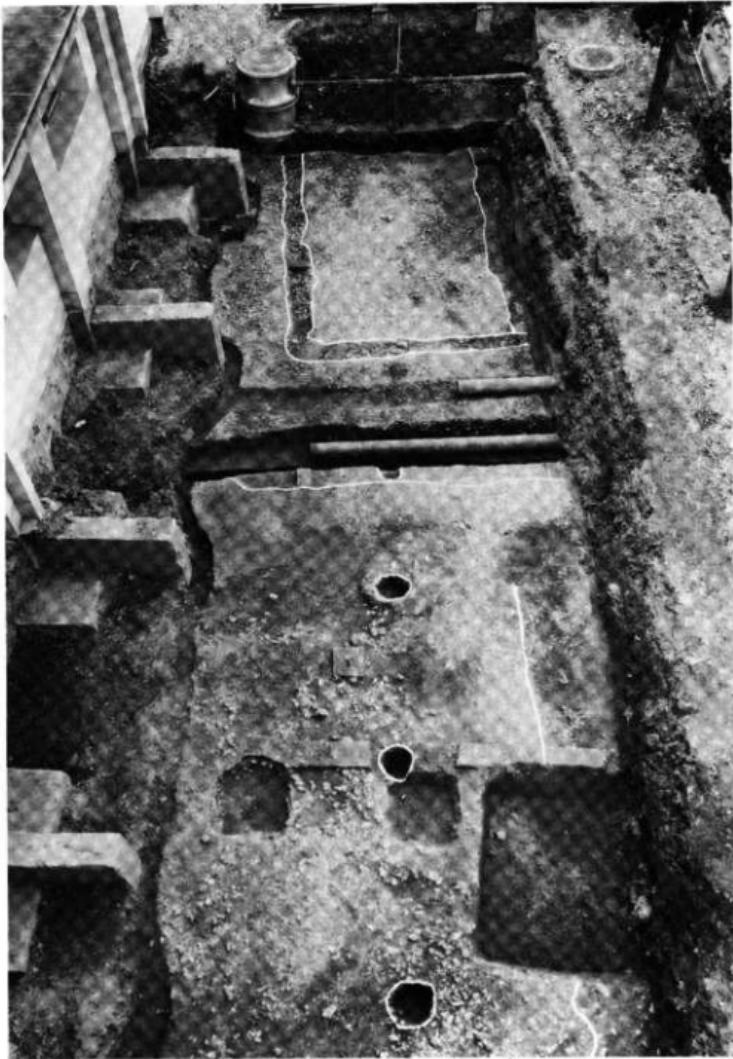
今回調査した町立第一小学校はこの水無瀬荘の東端あるいはそれにほど近い場所と考えられる。そして掘立柱建物SB 01が掘形のしっかりした総柱建物であり倉庫と思われ、莊家との関係を考えれば大変興味深いものである。また水無瀬荘については、田地として計算に入れられていないことが文献に見られ、その立地的条件より淀川水運を利用し各地の莊園からの貢納物を運送する際の中継基地的役割を持っていたのではないかという考え方もある。⁴⁾

次にSK 05、SK 07の出土遺物であるが、その形態や口径が9cm前後と13cm前後の大小2タイプに分けられることにより、小森俊寛氏の京都及び周辺出土土器編年案によるとVI期中から新段階に相当し、13世紀の中頃と思われる。この時期は後鳥羽上皇の水無瀬離宮が栄えた時期であり、当該地が水無瀬離宮と関わりが深いといわれる水無瀬神宮より直線距離にしてわずか200mと近いことや、試掘調査時に京都の鳥羽離宮や六勝寺において出土する京都洛北窯産剣頭文軒平瓦片が出土したことより、当地のそれほど遠くない場所に離宮が存在した可能性が高いと考えられる。⁵⁾

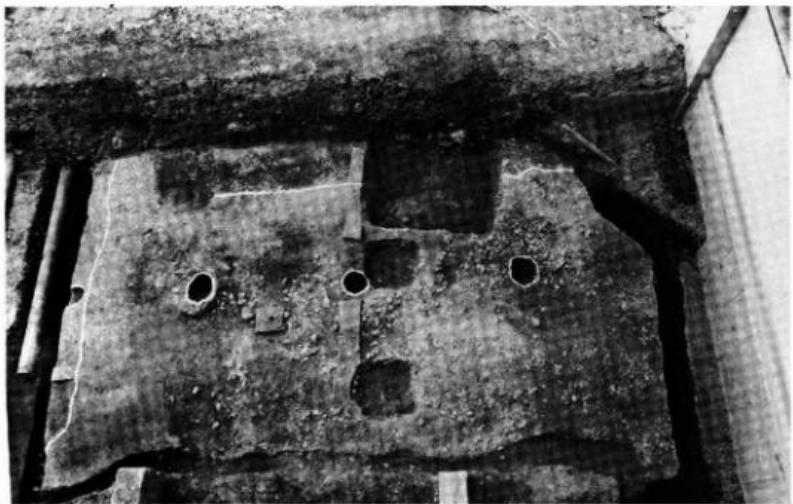
以上のように東大寺領水無瀬荘や水無瀬離宮と関係も含めて見てきた。しかし、今回の調査が島本町としては初の本格的発掘調査で過去のデータがほとんど無いのが現状である。そのため現時点では広瀬遺跡について、水無瀬荘や離宮と関係づけて語ることは少し早計すぎるようである。今後は周辺地域の調査に期待し、資料の蓄積を待って広瀬遺跡の全容を把握することが必要であろう。

註

- 1) 長山泰孝「古代の島本」『島本町史』(本文編) 1975
- 2) 鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会 1988
- 3) 西弘海「平城宮の土器」『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986
- 羽曳野市教育委員会「古市遺跡群V」『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書9』1984
- 4) 長山泰孝 (注1) 前掲書
- 5) 小森俊寛「平安京とそれに重複する中近世京都及び周辺出土土器編年案」奈良国立文化財研究所中近世窯器調査過程講義資料 1990
- 6) 吉村正親「平安京城出土瓦とその生産」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会 1987



A トレンチ全景（北から）



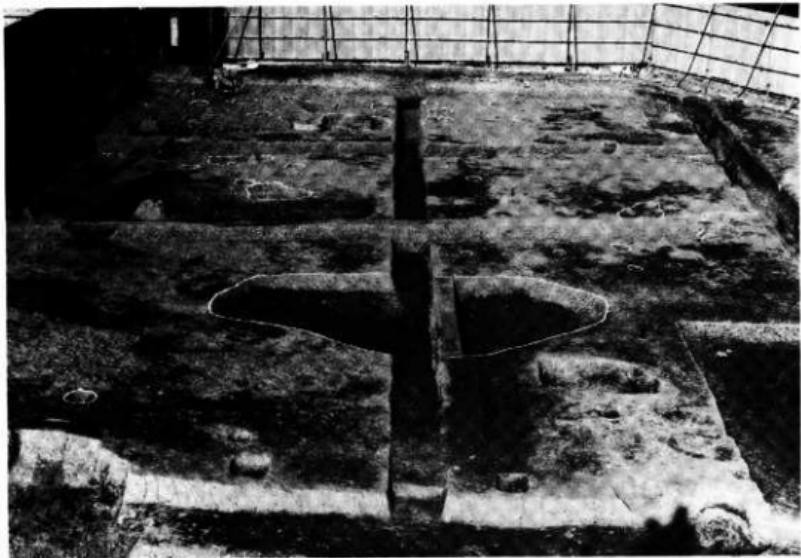
A トレンチ北半（東から）



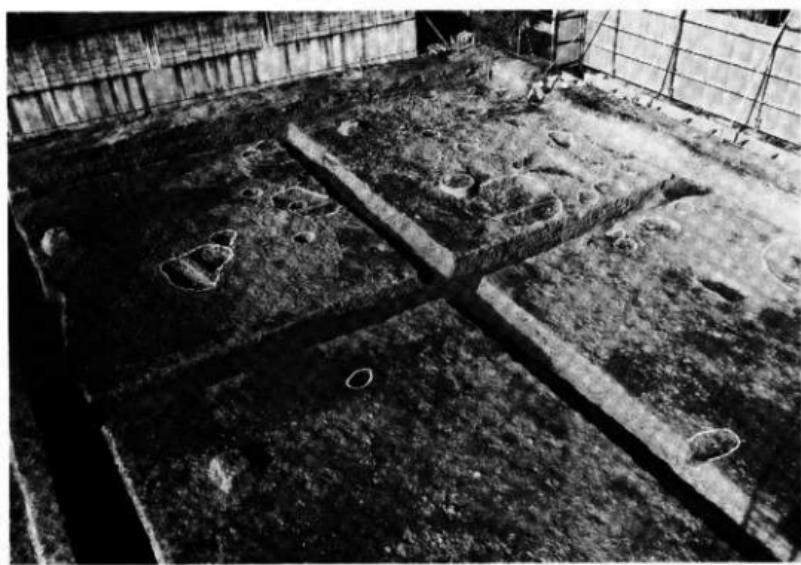
A トレンチ南半（東から）



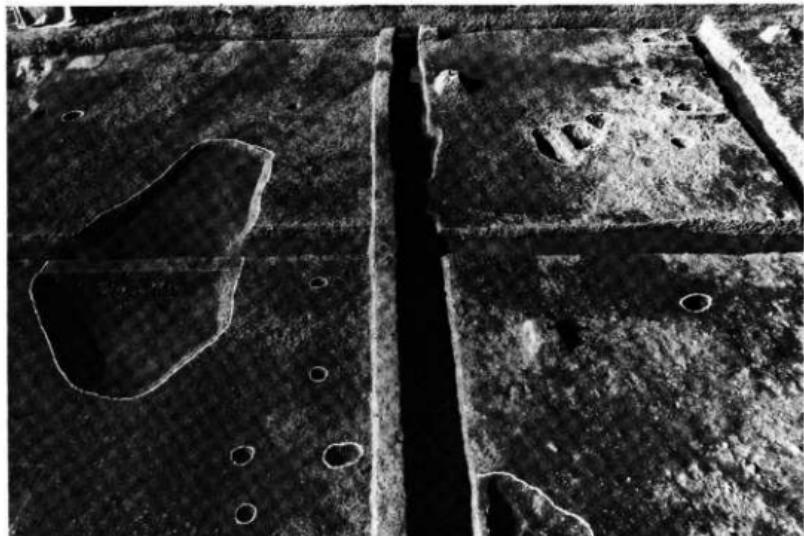
A トレンチ SD 01 遺物出土状況



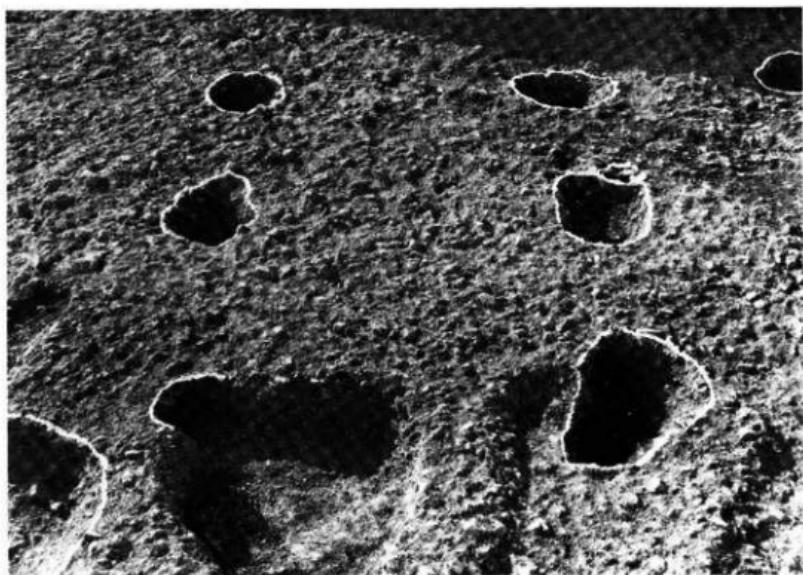
B トレンチ全景（南から）



B トレンチ北半（東から）



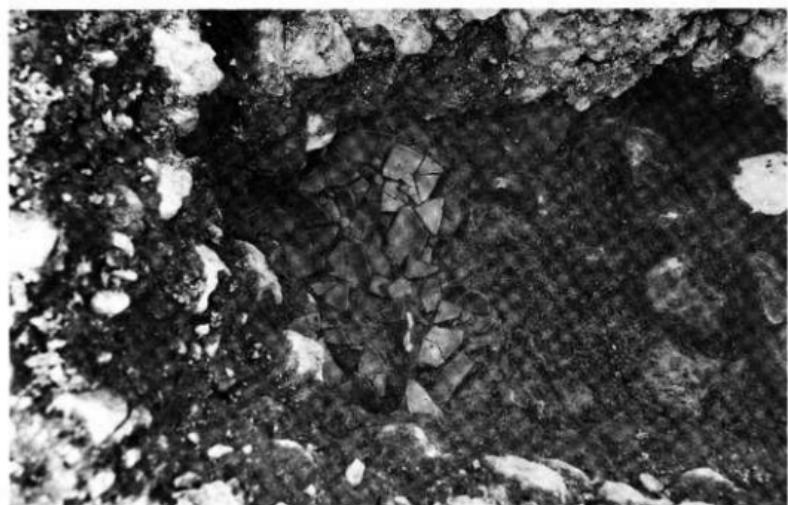
B トレンチ南半（東から）



B トレンチSB01（東から）



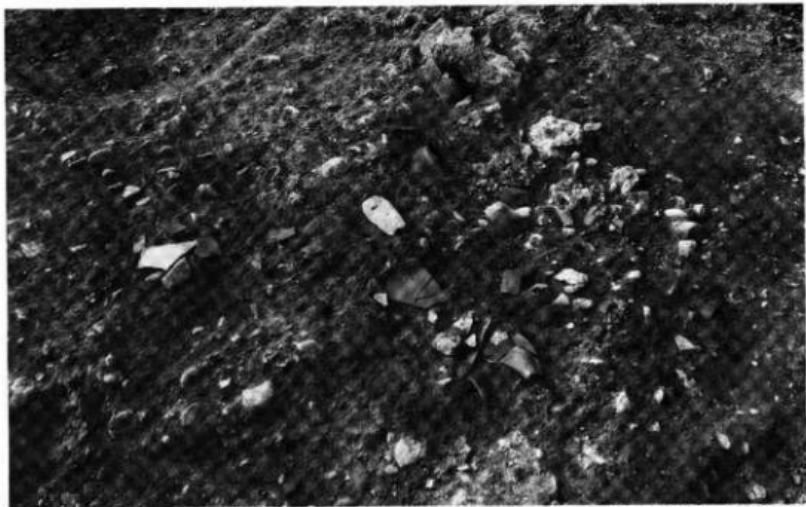
B トレンチSK08（西から）



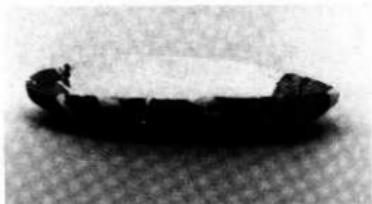
B トレンチSK07 遺物出土状況



B トレンチSX01 遺物出土状況 (1)



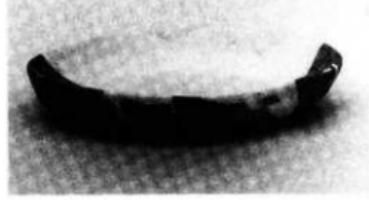
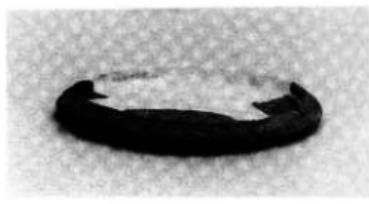
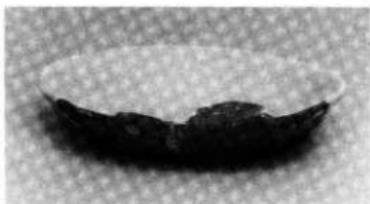
B トレンチSX01 遺物出土状況 (2)



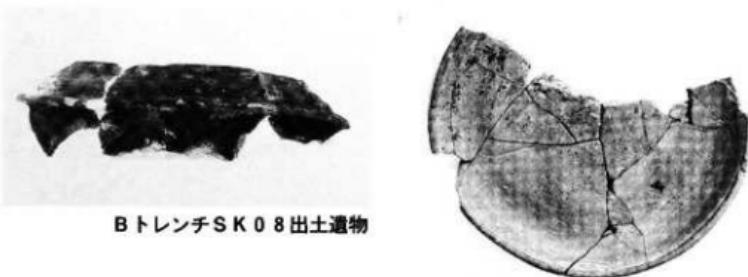
A トレンチ出土遺物



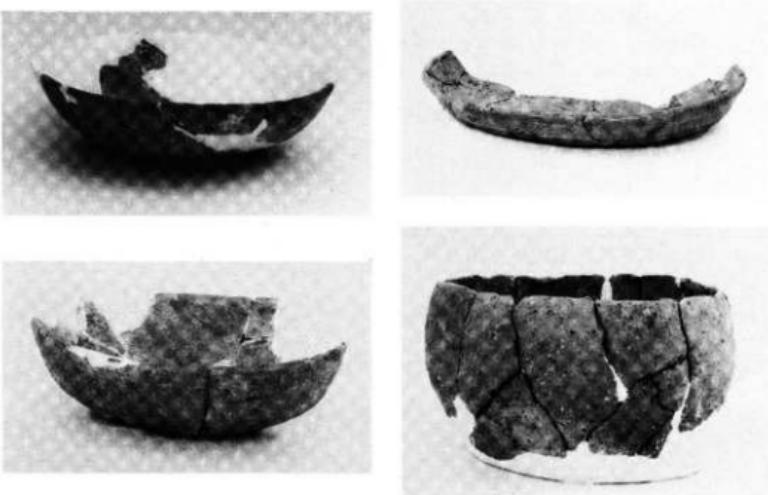
A トレンチ出土遺物



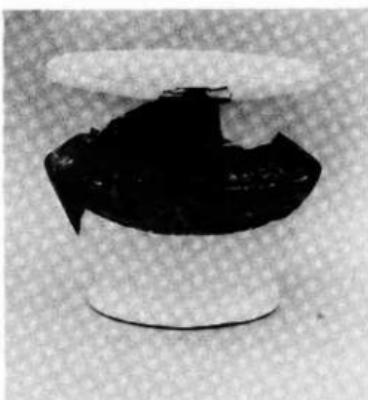
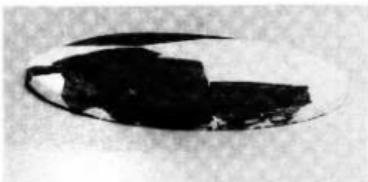
B トレンチSK 07出土遺物



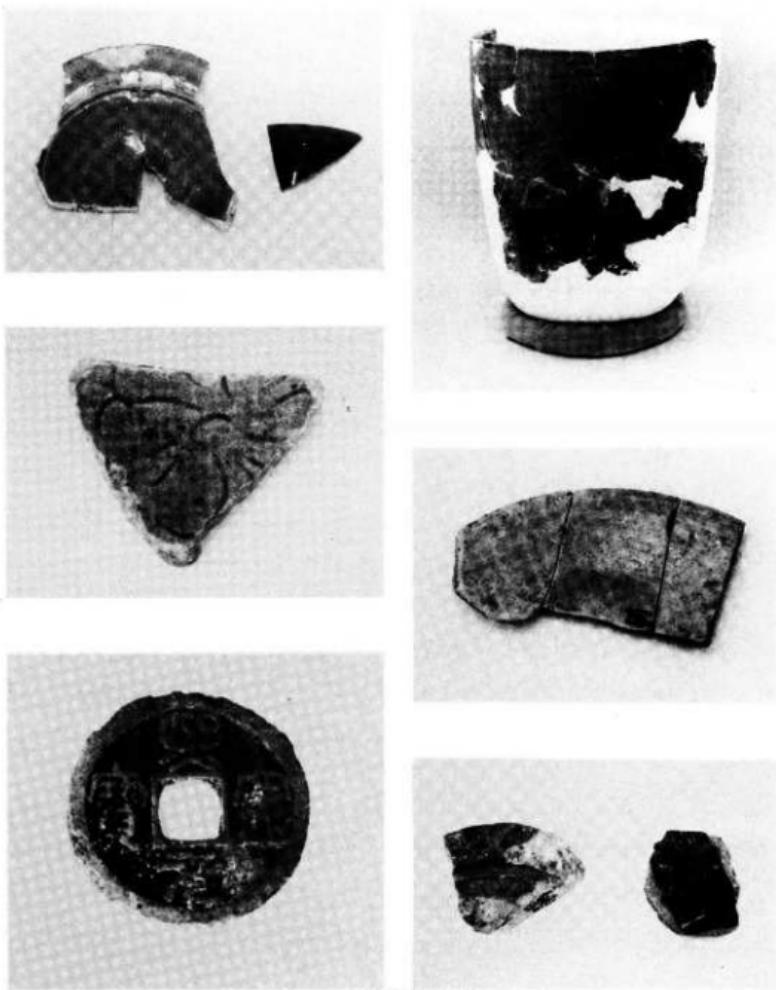
B レンチ SK 08 出土遺物



B レンチ SK 01 出土遺物



B トレンチ SX 01 出土遺物



B トレンチ包含層出土遺物

1991年3月25日 印刷
1991年3月30日 発行

島本町埋蔵文化財調査報告書 第1集

編集発行 島本町教育委員会

〒618 大阪府三島郡島本町桜井2丁目1番1号
TEL (075) 961-5151(代)

印 刷 野田印刷有限会社

〒618 大阪府三島郡島本町江川2丁目1番16号
TEL (075) 961-6460

